

“共感力”という名の悪魔のささやき  
——ラカンの「シェーマ L」から紐解くフロイトの超自我とその今日的諸問題  
清田友則

An “Empathy Force”’s Devil’s Whisper  
:A Lacanian Re-interpretation of Freudian Super-Ego under the “L-Schema,”  
and its Socio-Political Implications  
Tomonori KIYOTA

1 はじめに

幸せな人もいれば、不幸な人もいる。こればかりはどうにも致し方ないことだが、せめて不幸な人にかんしてだけは少しでも苦しみを和らげるべく、たとえば産婦人科の待合室に仕切りを設け、出産の幸福を間近に控えた妊婦たちと鉢合わせしないような空間的配慮を施すことはできないだろうか？——といったような主張をすると、多様性を何よりも重んじる今日の寛容社会においては次のような反論がただちに返ってくるに違いない。いわく「人間はそこまで狭量で自分勝手な生き物ではない」、「誰しも楽しいときもあれば、辛いときもある。そうした違いを乗り越えて異なる境遇にある他者と喜びや哀しみを分かち合うのが誰もが持つべき“共感力”ではないか」……。ちなみに、ここであえて引用符（“...”）を振ったのは、「共感」以上の“格律”（カント）的志向が「共感力」という比較的新しい言葉の中に込められているからである。そこでとりあえずその暫定的な定義を試みてみると、共感力とは、喜怒哀楽という四つの感情のあいだにそれぞれ立ち塞がる壁を越えた“力への意志”といったものといえようか。

いっぽう、ただの共感、ウィキペディアによれば「他者と喜怒哀楽の感情を共有すること<中略>もしくはその感情のこと」を指す。四つの感情のあいだに立ち塞がる壁が明示されていないのは、その必要性がないほど個々の感情が独立していることへの暗黙の了解があるからだろう。「複合感情」や「顔で笑って心で泣いて」といった、同時に楽しく哀しくもあるといったことはもちろんあるが、それらは一つに統合された感情というよりは、複数の感情の複合体として捉えるべきであって、足して二で割り一つの感情に統合するのは不可能である。

とはいえ、心はそれなりに複雑にできているから、多種多様な感情表現があってもおかしくない。ただ、そうした繊細な感情の動きがどこまで正確に他者に伝わるか——あるいは伝えるべきか——は、おのずと別問題であって、とりわけ——フェイスブックの「いいね」がまさにそうであるように——目的としての共感が最優先される場合、細かなニュアンスを排したある種の単純明快さが必要となってくる。哀しみの淵にいる友人に、哀しみとも喜びともつかぬ曖昧な表情で慰めるなど要らぬ誤解を招くだ

けだ。その意味では共感是一種の演技であり、ときには嘘も方便となりうるが、問題なのは、立場が変われば相手にも同じことが言えるため、ときによっては嘘と嘘が共鳴し合うような不条理な事態も起こりうる。嘘の上塗りには発言者の首を締めるが、複数の人間が互いに上塗りしあった挙げ句、相互不信という真逆の事態に陥ることもよくある話だ。とりわけ SNS の普及により、人間関係の潤滑油という共感ほんらいの機能が薄れるなか、新たな必要に迫られて生まれたのが“共感力”という造語であり、共感のもつ負の側面——相手への過剰適応や同調圧力による疲れやストレス、さらには欺瞞や後ろめたさといった道徳観念の疲弊や消耗——をより柔軟で快適な方向にもっていくのがその目的である。では、より具体的にその違いを見ていこう。

## 2 「共感」 vs. 「共感力」

まずは共感から。共感とは一種の“点”であり、それと対をなすのが“線”としての交流である。ちなみに交流には二つの“線”がある。一つは自分の心のなかに他者の感情を取り込むルート（自己←他者）。もう一つは他者の心に自分を投影するルート（自己→他者）。これら二つの線が交差する点が共感だと一般には思われがちだが、実際には片方だけでも成立する。小説や映画の主人公に共感する時、観客は相手からの見返りを求めないし、相手が虚構の人物であってもかまわない。「共」という文字には“二人ひと組”のニュアンスが含まれているが、実際には、最近流行り（？）の「ひとりエッチ」ともよく似た自己完結行為である。とはいえ、「オナニー」という言葉がすでに存在しているのにあえて「ひとりエッチ」と言い換える着想の背後にほのかな屈折感が漂うように、共感もほんらいなら二人で分かち合うべき営みへの屈折した想いが「共」の裏側に潜んでいるように思える。

そこで真相を確かめるために虚構の世界からいったん離れ、ドライで殺伐とした現実空間にしばし立ち帰ってみよう。さいど産婦人科の待合室に戻ると、出産を控えた妊婦たち、あるいは乳がんを告知された患者たちが囲いを挟んだ別々の空間で、それぞれに喜びや不安を分かち合うのは一種の情緒的アパルトヘイトなのではないか？、倫理的に好ましくないのではないか？、と一気に囲いを取り払い、妊婦の A さんとがん患者の B さんを無理やり相席させたらどうなるか。当然 A さんは喜びの表情を控えるだろうし、B さんも余計な心配をかけぬよう努めて平静を装うだろう。とは言うものの、同じ空間にいること以外、何ら接点のない者同士が妙な配慮を見せ合うのも不自然だし、しなかったらしなかったで、当人は気遣いのつもりでも、相手には無神経な態度と誤解されるリスクもある。こうしてそれぞれの心のなかで善意の腹の探り合いがおこなわれるわけだが、両者とも同じ心遣いに根ざしている点では一致しており、それはそれで共感といえなくもない。ただ、それが目に見える形で相手に伝わらないため、共感という認識までにはいたらない。このいってみれば“共感なき共有”が演技やわざとらしさを加速させ、空疎な気遣いがストレスを溜め込むだけだとしたら、むしろできるかぎり他人との接触を避け、スマホを盾にまわりを遮断するほうが心の健康を保つうえで大切だと言えなくもない。

そもそも共感なき共有という矛盾が生じるのも、共感の「感」よりも共有の「有」のほうに重きが置かれ、「有」をスムーズに駆動させるための手段として、ほんらい多岐にわたる感情を“喜怒哀楽”という

四つのカテゴリーに無理やり押し込めたことによる。それにより細かな差異は切り捨て、「喜」なり「哀」なりの一語で異なる者同士を共有の枠内に押し込む行為自体が目的としてひとり歩きするようになる。ことわざでいえば「類は友を呼ぶ」や「同病相哀れむ」といったよくいえば親近感や同調性、悪く言えば内輪意識や排他性に対し近年、疑いの目が向けられるようになったのも、一見自然な関係構築のように見えて、実は友だち作りの口実にすぎない本末転倒的な概念が“共”ではないかと——「アメトーク」の「～芸人特集」等を観るにつけ——人々が訝しみはじめたからだ。

このように、暗黙の誘導作用への違和感が共感から共感力への移行の背景にあるとしたら<sup>1</sup>、後者に込められたものとは、親近感や同調性とは裏腹の、いうなれば“親遠性”、“親他性”といった、人間の心の重力に反する——あるいは聖書の「汝の隣人を愛せよ」とも通じた——他者への配慮の抜本的見直しへの期待であろう。ところでここでいう「隣人」とは、何かあれば助け合う「ご近所さん」というよりは、適度に距離を置き余計な口出しをしない、場合によっては警察の出先機関も兼ねる相互監視網の末端のような存在である。そんな不安とストレスしかもたらさない人間関係を束ねるにはどうしても外的圧力が必要となってくるが、苦勞へのご褒美も用意されており、筋トレのように鍛えあげることでライザップの“アフター”のような見違える姿に変身できれば本人も周囲もハッピーになれる。ただ一方で共感が厄介なのは、食欲のおもむくままに飲み食いしていれば自然と太ると同じくらいに人間の心に宿る自然な感情の発露であることで、これに対抗するには意識的、人工的負荷をかけるしかない。ちなみに後に触れるフロイトの代表的論文「文化への不満」（2007）では、こうした負荷の総称を示す概念として「文化」「文明」が用いられている。

共感についても一言。共感を当たり前のようには評価する側の念頭にある対義語は「反感」であろう。本論では反感を“嫉妬”の側面から論じるつもりだが、ここでは、反感は共感の補完概念と指摘するに留める。ところでいま述べたことと矛盾するようだが、共感に片思いは存在しない。たとえ相手が虚構の人物であっても同様である。もしいきなりスクリーンの中からあなたに向かって「迷惑だから共感しないで！」と言われて、それでも共感し続けることなどできるだろうか。もちろんそのようなことは現実には起きないが、共感のメカニズムが仮想上の両想いの上に成り立っていることを示唆する点で興味深い。そもそもなぜ両想いでなければならないのか。それは、本人が意識しようとしまいと、「ありのままのわたし」を肯定してもらうには、まず相手の「ありのままのわたし」を肯定してあげねばならず、このギブ・アンド・テイク行為自体が共感のいわば貸借対照表的基盤にあるからだ。

こうして、最低二人の「ありのままのわたし」が登場することになるが、もちろんふたりの「わたし」の中味はそれぞれに異なる。ただ、中味はじつはさして重要ではなく、むしろ「ありのままのわたし！」と叫ばずにはおられないほど苦痛をあたえる他者からの疎外意識の“共有”（もしくは“共有の共感”）のほうがより重要だ。もっともこう言うと、先の“共感なき共有”と矛盾してしまいそうだが、中味がない（＝疎外の中味は重要ではない）点では両者は一致している。それよりむしろ問題は、中味の有無に関わらず「誰も理解してくれない」殺伐とした毎日を誰もが送っており、すべての人間が「中味のない人間」（アガンベン、2002）という点では大同小異という、もはやギブ・アンド・テイクが成り立たないほど全体化した——よって共感の余地すらない——状況のほうである。そこまで事態が進行してし

まうと、生産性をもった共感というよりは、愚痴への共感といったその場凌ぎの人間関係以上にはなかなか発展しにくい。しかも愚痴への共感、聞く側にある種の後ろめたさを植え付けるため、相手が立ち去れば別の誰かにすぐさま相手の陰口を叩くことで厄介払いするといった負の連鎖（土井隆義のいう「友だち地獄」、2008）もとりわけ免疫性の弱い最近の若者によくありがちである。

### 3 「相互能動性」 vs. 「相互受動性」

このように易きに流れがちな人間の弱さが、「共依存」や「母子密着」といった、ジジエクの造語を借りるなら（2008: 50）、「相互能動性」（inter-active）とは真逆の「相互受動性」（inter-passive）——要は「責任のなすりあい」——が現代社会の息苦しさの温床となっているのだが、同時に強力なマーケティングロジックにもなりえていて、抗うつ剤の爆発的な売れ行きにも示されるように、成功の何よりの秘訣は依存の強化拡大である。共感の対象はほんらい人だが、人をモノで代用しても十分に成り立つことは後ほど述べるとして、依存であれ共依存であれ、「誰も理解してくれない」他者への不信感が病理の根底にあるとすれば、息苦しい社会から脱するために最初にくだすべき処方、*“抗不信剤”*に頼らぬ何かしらの自助努力であろう。「相互受動性」に問題があるとすれば、その反対の「相互能動性」——すなわち*“共感力”*——に転換して試みるのが、まず最初にやるべきことだ。

では早速、その真価を産婦人科の待合室で試してみよう。まずは作業仮説として、ざっくりだが以下のことを確認しておきたい。相互受動的患者が、事なかれ主義から幸福と不幸が相互に隔離された待合室を選びがちなのに対し、他者への配慮を重んじる相互能動的患者は、幸福と不幸が混在する待合室を率先して選ぶ傾向にあるとしよう。前者についてはすでに述べたので後者に移ると、そこで待ち受ける光景——間もなく臨月を迎える、見ず知らずの妊婦を無言ながらも暖かいまなざしを向ける余命幾ばくのがん患者の姿には胸が詰まるが、妊婦も妊婦でまなざしをさりげなく受け止め、感謝と申し訳無さで心を痛めているかもしれない。この無言の喜びと哀しみのやりとりを、精神分析的立場から考察してみたい。

精神分析が取りあげる心理メカニズムは、主体の意志を越えた、もしくは裏側に潜む無意識に焦点を当てる。こうすると、共感力をもつ能動的側面と矛盾するようだが、そうではない。よく知られているように、フロイトのコペルニクス的転回は、主体の中心軸を従来の意識（＝自我）から無意識にずらした点にある。「我を忘れて...」や「無私の心で...」といった表現を使うとき、無意識は全開状態にある。どこに向けて開いているかという、もちろん他者に向けてだが、ラカンがしばしば引用するランボーの「私とは一個の他者だ」という言葉にもあるように（1998: 10）、自我にも開いている。その意味では——ここが見逃しがちな点だが——自我も無意識の一部だ。

逆に無意識が閉じている（ように見える）とき、われわれは自我の存在を強く意識するが、だからといって自己肯定感に耽れるような心地よさとは程遠いのは、「自意識過剰」という言葉にもあるように、自我に集中すればするほど、「我思う、ゆえに我あり」の「我あり」の部分だけが突出し、自我が空回りして身動きがとれなくなるからだ。逆に自我の拘束が緩むと、われわれは*“自分でない”*ことへの解放感

を強く意識する。思いもよらぬアイデアや関心が芽生えたりするのもそのときで、“無”から何かが生まれることへの純粋な喜びを感じることで自己肯定感が高まる。ただ、そんな刺激に満ちた状態も長くは続かない。理由は簡単で、ずっと我を忘れたままだと日常生活が覚束なくなるばかりか、自我の存在基盤が危うくなるからだ。そもそも無意識の「全開」という表現自体に語弊がある。ラカンが言うように、それはあくまでほんの一瞬垣間見える「裂け目」にすぎず（2000: 71-85）、全開したままだと自我とのバランスが崩れ、狂気というとんでもない事態に陥ってしまう。フロイトにしても同様に、無意識を主体の中心に据えようとまでは主張しておらず、それまで心の中心に君臨してきた自我を揺さぶるぐらいがせいぜいできることだが、それだけでも臨床効果は絶大である。

以上、共感と共感力の違いを駆け足で整理してみたが、その関連で出てきた自我と無意識、相互受動性と相互能動性という二つのセット概念も加え、簡単に図式化すると――。

共感≒自我≒相互受動性

共感力≒無意識≒相互能動性

最初の二組（共感と共感力、自我と無意識）についてはなんとなくイメージが湧くだろう。共感の本質とは端的に言って同類性にあり、時事ネタやネットスラングでいうところの「ネトウヨ」、「パヨク」、「学歴フィルター」、「港区女子」といった、存在があやふやながらもキャッチーな言葉で無理やり括った集団などがそれにあたるが、どれも露骨なまでに「共感なき共有」という同類性の負の側面が目につくため、あたかもネットで嗤われるためだけに作られたような胡散臭さをもつ<sup>2</sup>。

一方、自分と異なる他者とのつながりを重視する共感力の最近のイメージを列举すると、「LGBT」、「マイノリティー（人種、階級、ジェンダー）」、「#MeToo」、「リベラル（＝反安倍、反トランプ）」等がすぐに思い浮かぶ。これらに共通するのは、それまでの当事者主義（「アイデンティティ・ポリティクス」）によくありがちだったアイデンティティの独占への反省から、相互能動性――非当事者たちへの門戸の解放と同時に非当事者への積極的受け込み――により重点が置かれるようになったことであり、これがなければ共感とさして変わりはないだろう。ところで差異を極限まで推し進めると、楽曲「世界に一つだけの花」<sup>3</sup>がそうであるように、人の数だけアイデンティティが量産され収集がつかなくなり、誰もが「個性的」になることでかえって没個性的になるというパラドクスをはらむ。

共感が「一」に収斂していくのにたいし、共感力は「多」に拡散する。量の側面だけ見ると、後者のほうが多種多様な他者（差異）への個別の配慮をしなければならない分、前者より手間がかかるが、長い目で見れば、無理やり「一」の鋳型にはめ込むことで心の凝りを悪化させ、余計な出費を招くことよりもお得である。整骨院やマッサージ店で満ち溢れた時代、それまで自我の縛りにもっぱら充てられた力を「多」に分散させ、「みんな違って、みんないい」（金子みすゞ）と耳元で囁いてくれる「共感力」に絶大なほぐし効果があるのは間違いない。

――こう書くと、なんだかよいことづくめのように見えるが、実際のところはどうなんだろう。理念としては共鳴できるし、よほど凝り固まった原理主義者でもないかぎり反駁する者はいないだろう。た

だ——一転、世界政治の現状に目を向けて見ると——露骨な人種差別主義者のトランプが大統領になったり、安倍首相の支持率が一向に下がらなかったり、EUの良心メルケルでさえ移民の強制送還に路線転換したりと、理念の裏に隠された本音のほうの方がより剥き出しになっているように思えなくもない。

#### 4 「プアホワイトは何を欲しているか？」

そもそも共感力が共感より倫理的に重んじられるようになったのは、共感の裏に透けて見える偽善や胡散臭さに居心地の悪さを感じる人々が増えたからだ。なので共感力をよりよく差別化するには、自我をひたすら消耗させる共感の残滓を断ち切らねばならないはずだが、現状なかなかそうっていないのは、われわれの努力がまだ不足しているからだろうか。それとも、理念と本音がコインの裏表のような切っても切れない関係にあるからだろうか。だとしたら、以前より偽善が巧妙に入り組んでいる分、素朴な共感よりかえって質が悪い。しょせん無理な努力目標なのだとしたら、最初から無駄な努力などせずそのまま共感に留めておけばよかったのではないか。

こうした起こりうる批判へのリベラルからの抗弁や反論はすでにさまざまな形で行われているが、現時点で言えるのは、鉄の現実の前では理念は必ず崩壊するといったことではおそらくなくて（そう言い切れるにはもう少し歴史の推移を見届ける必要がある）、理念には必ず反発や反動がともなうということである。理念とはそもそも実現されていない願望を指すものであって、日の目を見るまで不満や憤懣が鬱積し続けるのは避けがたい。とりわけリベラルほどの忍耐力を持たない右寄りの不満分子たちがLGBTや有色人種をやり玉に挙げるのも、これまでずっと抑えていた鬱憤をようやく大統領のお墨付きで堂々と吐けるようになったからというよりは、むしろ彼らの支持母体であるプアホワイトたちが自ら招いた惨めな社会的境遇が理念の実現を妨げていることへの負い目を、別のマイノリティーに転嫁することで凌いできたことにそもそもの原因がある。しかも皮肉なのは、責任転嫁という行為自体、社会的弱者としてのアイデンティティをめぐる一種の交換活動であり、同じ貧困の共有なしには成立しない。つまり俗に言う近親憎悪のことだが、心理学的に興味深いのは、「類は友を呼ぶ」と「敵を作る」が表裏一体なことであり、それこそまさに彼らが否認する嫉妬の最大の特徴である

「でもそれはリベラルで高学歴な白人に対してだけであって、黒人やLGBT等に対しては、憎しみしかないんじゃないか?」。もっともな疑問である。そこで精神分析、とくにラカンがいうところの嫉妬の定義について説明しよう。喩えていえば、嫉妬は一つしかない椅子をめぐる椅子取りゲームのようなもので、そこが似て非なる羨望との違いである。テレビで引っ張りだこのタレントが、有名であること以外はあらゆる点でわれわれも引けをとらないのに嫉妬を感じさせないのは、そもそも椅子取りゲームにわれわれ自身が参加していないからだ。生存を賭けて必至の思いで栄冠を手にした彼らをわれわれがのん気に祝福できるのは、土俵に上がらなかった時点ですでに白旗を挙げており、そんな不甲斐ない過去の自分を思い出したくないからだ。同類かどうかの決め手は、人生一か八かの勝負に挑んだかどうかであって（ヘーゲルの「主人と奴隷の弁証法」を思い出されよ）、才能とか優れた容姿とか、それ以外の要

素は嫉妬の決め手にはならないことを、本人は自覚しなくとも神、いや自身の無意識はお見透しなのだ。

それでは、プアホワイトは誰と椅子取りゲームをして負けたのか。一見するとトランプを忌み嫌う高学歴でリベラルな、マイノリティーにシンパをもつ同じ白人たちのように思えるが、そもそもリベラルな白人は建前上、同じ人種への同類意識を持たないことになっているので、プアホワイトがどれほど挑発しようとゲームに応じてはくれない。他方で、他のマイノリティーのなかにも弱者のイメージと矛盾する様々な属性——高学歴、裕福、特権階級——をもつ者はたくさんいて、そうなると、人種や性的志向等にだけに憎しみのターゲットを絞るしかなくなるが、肌の色の違いだけがルールの土俵に上がる者などいるはずもなく、相手不在の土俵で不戦勝を宣言しようと八百長呼ばわりされるのがオチである。あのトランプでさえ、人種をルールから除外する社会原則にはしたがっており、挑発することはあっても、肌の色にハンディをつけるような露骨な違法行為はしていない（むしろ「アフーマティブ・アクション」という名のハンディを付けるのはリベラルのほうだ）。

そんなとりあえず建前だけは公明正大な社会環境のなかでプアホワイトが唯一合法的に嫉妬の一撃を加える機会があるとすれば、それはみずからをあまたあるマイノリティー集団の一員とみなし<sup>4</sup>、黒人とヒスパニックの抗争などに参戦し、バトルロイヤルの輪を繰り広げることである。事実、他のマイノリティー集団に対して彼らが抱く憎しみの実態は、かつてのナチやKKKのような異文化や肌の色への嫌悪というよりは、自分たちと似たりよったりの惨めな境遇（貧困、自己尊厳意識の欠如、等）への同族嫌悪に近く、「共有なき（負の）共感」を彷彿させるものとなっている。他のマイノリティー集団がアフーマティブ・アクションから諸々の恩恵を受けていることに対し「逆差別だ！」とプアホワイトは訴えるが、WASPのような特権をもたない彼らが逆差別を訴えたところで、中味は他の被差別集団となんら変わりはない以上、説得力を持たない。

## 5 「マイノリティー」としてのプアホワイト

こうしてプアホワイトがみずからに課す欺瞞は、次の三つのゴミ（「white trash」）に分別される——。

- 1) 他マイノリティー集団への嫉妬を憎悪にすり替える。
- 2) カースト上位の白人に対して向けるべき嫉妬を政治的立ち位置の違い（トランプ支持が否か等）に矮小化する。
- 3) 「ありのままのゴミ」としての自分を貫くためにいわば人種的自傷行為を繰り返す<sup>5</sup>（なぜなら、これら誤魔化し作業を内省によってみずから認めることは、自身の依って立つ「トラッシュ」としてのアイデンティティを揺るがしかねないから）。

ただ、このような屈折したアイデンティティは、これまた実は他のマイノリティー集団のそれとそれほど変わらない。マイノリティーにとって強固な自己肯定感が必要とされるのは、まさに彼らが“被差別集団”だからであって、マイノリティーの肯定自体、そもそも自己矛盾だ。差別の撤廃という究極の目標を達成するための過渡的手段としては有効かもしれないが、マイノリティー概念に差別の要素が含まれたまま自己肯定してしまうと、差別の社会的基盤まで容認しかねない。マイノリティー集団がどれ

ほど結束し数のうえで上回ろうと、決してマジョリティーの仲間入りできないのもそのためで、レインボーフラッグにも象徴されるように、色の違いあつての全体であり、七つの色を一色に統一してしまうとまったく別の旗に様変わりしてしまう。アメリカの人種比率で非白人の総和が白人を上回るようになるのは時間の問題といわれているが、たとえそうなったとしても白人の覇権は揺るがないだろうと予測されるのは、白人の権力が盤石なだけではないのである。

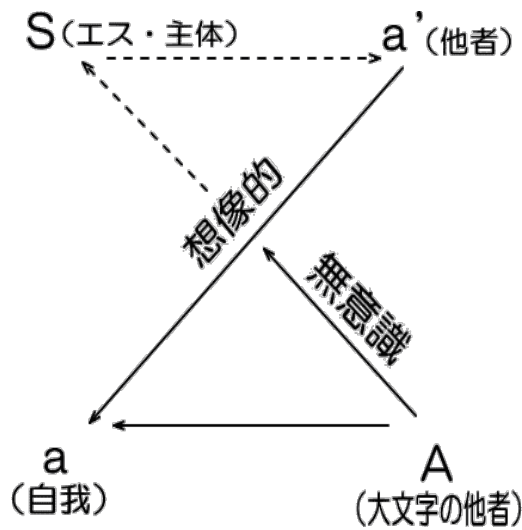
プアホワイトの隠れたアイデンティティもそこにある。彼らがマイノリティー集団への合流を断固として拒絶するのは、彼らの「共有なき共感」の唯一の対象が同じ白人——もともと、共有の中味を一つももたない空虚な記号としての「白人」だが——だからであり、ただの片思いにもかかわらず「共感」したつもりになれるのは、ドルオタやジャニオタがそうであるように、そうあつてほしいと思ひ描く古き良き時代の（昔の映画の再放送で観たような）空想上の「白人」だからである。二次元・三次元といえば、日本のサブカルの特売特許だが、プアホワイトも妄想力において負けてはいない。空想の悦楽という上部構造（文化）の裏には必ず絶望という下部構造（現実）があつて、地上と地下はなぜかつながらない仕組みになっている。そこを無理やり突破しようとするとは必ず軋轢が起こるはずだが、かつての南北戦争のような同じ白人同士の血で血を洗うような戦いが起きないのは、プアホワイトにとっての「良い白人」（白人至上主義者）と「悪い白人」（人種平等主義者）がそれぞれ二次元と三次元と別の次元に棲み分けしているため、衝突しようがないからだ。

では、当の片思いの対象である天上の白人たちはどこに目を向けているのか。もちろん他者としてのマイノリティーであり、「多」と「少」の境界線をなくすことでこれまで独占していた特権的立場を放棄するのが、彼らの少なくとも公の理念である。ただ、それはあくまで努力目標としての理念であつて、現状は必ずしもそうなっていない。そこを保守反動勢力から「偽善じゃないのか？」と叩かれるわけだが、先に述べたように、矛盾は理念に内在するものであつて、理念が実現できれば同時に理念の概念もなくなり、そのための手段としての「共感力」も必要なくなる。現時点で共感力が必要なのは、「共有なき共感」のギャップを埋めるための手助けとして「力」がどうしても必要だからである。

## 6 「シェーマL」

それでは、精神分析の立場から「力」の具体的使用方法を見ていこう。それはなにより自我から無意識へのずらしの中に見てとれる。むろん無意識の特性上、主体はそのことに気づかない。ここで無意識の持つ両義性について少しおさらいしておく、*“unconscious”*の“un”は通常「無」と解されるが、ラカンも指摘しているように（2000: 32）、フランス語の“un”には「一」（*“un, deux, trois”*の“un”）という意味もある。ラカンはこれを「一者」としての「大文字の他者」につなげて論じているが、シェーマLには、Aに加え「小文字の他者」（またの名を「他我」*a'*）もある。ちなみに「'」が付いているのは、自我*a*との微妙な差異を示すためであるが、ラカンにとって自我と他我は本質的に置き換え可能な等価物であり、このことは、ランボーの「わたし（自我）は一個の他者（他我）だ」からも推察できよう。では、同様に「わたしは一個の『大文字の他者』』といえるかどうか、シェーマLから紐解いてみよう——。





〔自我の想像的機能と無意識のディスクール〕<sup>6)</sup>

まず矢印の向きに注意してほしい。この線は「通時的」流れ（例：「これ→は→ペン→です。」）となっており、文には始まりからピリオドにいたるまで一定の時間がかかることを示唆している<sup>7)</sup>。ちなみにシェーマLには二つの通時的センテンスがあり、一つは、「A→S→a'→a。」の流れ、もう一つは、「A→a。」の流れである。

二つに共通するのは、どちらもAで始まりaで終わるところだが、これが何を意味するかというと、Aについては、「言葉話す生き物」を背後で操る真の主体（主語）が言語、もしくは言語を擬人化した「大文字の他者」であること。ちなみに、「一」としての大文字の他者は、発案者ソシュールの区分でいえば、“langue”（日本語、英語、etc.）としてのそれではなく、“language”（言語一般）を指す。AがSより先に来るのは、幼児の物心がつく前と後では主体の有り様がまったく異なることから推察できよう。ところでAからSに向かう線は途中で点線に変わるが、それは「想像的」直線を境に左上半分の領域では言葉がイメージに色塗られていることを示唆するものだ。逆に右下半分は（誰も話さない）純粹言語のままの状態にある。コンピュータの喩えでいけば、左上半分は画面に映る識別判読可能な画像や言語、右下半分は昔のコンピュータ画面によくあるアルファベットや記号の意味不明の羅列をイメージするとわかりやすい。

シェーマLの右上にあるSはフランス語「Sujet」（主体、主語）の略だが、その横に頭文字の発音が同じドイツ語のEs（ラテン語のId、英語のIt）があるのはなぜかということ、「A→S→a'→a。」のセンテンスが最後のピリオドまでにはいたっておらず、「それ」としか言いようのない宙ぶらりんの状態にあるからである。とはいえ、主語を発した時点で（「私は……」）、読み手はいずれ意味が完結すること（「……である。」）は予期されており、実際、時をまたずに次の語a'なりaが表明される。aはフランス語 *autre*（他者）の略語だが、同時に *objet*（対象）でもあり、二つ合わせて“*objet petit a*”（小文字の対象a）と表記されることもある。他者が対象（目的語）であるのは何より文法上の理由からで、一方で主体と対象

が哲学的な対概念であることと、他方で主語と目的語が言語学的な対概念であることは対応関係にある。

ちなみに対象が  $a$  と  $a'$  と二つあるのは、 $A$  を基盤にして  $S$  が立ち上がるのと同じ論理に基づいている。フロイトの言葉だと「置換」(または「移動」「置き換え)、ラカンの言葉だと「換喩」や「隣接」だが、上の説明では言葉の並びの通時的流れ ( $\rightarrow$ ) がこれを指す。「これはペンです」と言うとき、発話者はペンがどういうものかを知っているが、この既知のペン、たとえば幼いころ初めて見たペンの知識がなければ、「これはペンです」と言うことはできない。初めて見たペンが赤色のペン  $a'$  で、ここにあるのが青色のペン  $a$  だったとしても「これはペンです」といってしまうのは、色の違いよりペンであること自体を優先したいからだが、では幼稚園児はどうやって状況に応じ個別性(色)よりも一般性(ペン)を優先する術を学んだのだろうか。

初めて見たペンがたまたま赤色だった幼稚園児の原体験はペン=赤ペンである(ペンより前に赤ペンという言葉学ぶことはありえない)。ところがその後、別の機会に青色のペンがあることを発見し、ペン=赤ペンとはかぎらないこと、そして青ペンも赤ペンも区別なしに「ペン」と呼ばれることを知る。時系列的には赤ペン $\rightarrow$ 青ペン $\rightarrow$ ペンとなるが、その後、時系列は忘却され、時に応じて赤ペン、青ペン、ペンと言い換えられるようになる。この「時に応じて」とは、三つのペンが同じ時間帯(「共時的」)に並ぶことを意味するが、ペンが一つしかない場合、三つの“時”を同時に使うことはできず、どれか一つを選ばなければならない。その時、赤か青かではなく、色かペンかのどちらかになり、さらにペンが選ばれるのは、赤を青で置き換えられなくても、ペンならどの色でも代替できるからである。これが「置換」の基本ロジックだが、もちろん状況によってペンを赤ペンに置き換えることもできる。とはいえ、あらゆる色のペンを赤ペンと呼ぶことはできない。矢印が片方向なのはそのためである。

ここまでが「 $A \rightarrow S \rightarrow a' \rightarrow a$ 」の後半部分「 $a' \rightarrow a$ 」についての概略だが、前半部分「 $A \rightarrow S$ 」に移る前にもう一つのセンテンス(「 $A \rightarrow a$ 」)について触れておきたい。「 $A \rightarrow a$ 」と「 $a' \rightarrow a$ 」は相関関係にあり、前者がコンピュータを裏で操作する演算システムだとしたら、後者はそれをわかりやすく伝えるインターフェースのようなものだ。あるいは別の喩えだと、前者は市場、後者はそこで実際に取引される商品と捉えることも可能である。目に見える(「想像的」な)個別の商品のやりとりとは別に、他の無数の商品群の値動きへの対応が同時に行われるのがいわゆる「市場の動向」である。この観点から「わたしは一個の「大文字の他者」である」を再解釈すると、「わたし」(自我)の価値を決めるのは「大文字の他者」(市場)であり、自分の価値を自分で決めることはできない。しかもどういう理由で私が値付けされたかは、市場の原理がまさにそうであるように「神のみぞ知る」である。だからといって自分の値段が気になることに変わりはなく、そうした不安な心理が人をして「欲望する生き物」たらしめるのだとしたら、先の命題を「わたしの欲望は一個の『大文字の他者』の欲望である」と言い換えることもできよう。

ちなみに「神のみぞ知る」とよく似た「at the mercy of God」(神のなすがままに)も人間の無力さを想起させる表現だが、一方で「mercy」(慈悲)という導きの糸があることも暗に示唆されている。そして

導きの糸の先にあるのが a' だとしたら、a' を模範（鏡像）に自身が望む像 a を作り上げていくこともけだし可能ではないか。

## 7 共感力とは“誰”か？

ここまで論じてきたことを整理してみよう。冒頭の議論では、「共感」であれ、よりパワーアップした「共感力」であれ、自我を発信源とする他者との関係構築が問題となった。だが、自我の機能を無意識という広い枠組みで捉えてみると、自我は主体の核というよりは、無意識の枠内における複数の矢印の流れの一効果と見るほうがより適切である。矢印の流れを引き起こすエネルギー（「リビドー」もしくは「欲動」）の発生源は「主体」ではなく「大文字の他者」であり、共感力の発信源も主体を背後から後押しする A に位置づけられる。

「わたしの欲望は一個の『大文字の他者』の欲望である」は、これを別の言葉で言い換えたものであり、通時的には主語と目的語の順序を逆にしたほうがより適切だ。それでもあえて主語の立場にこだわるなら、「わたしは～させられる」と使役表現にすべきだが、それだとしっくりこない。なぜしっくりこないかという、「主体的」「主観的」といった形容詞にも窺えるように、主体がこれまで対象（客観、客体）との対比で——しかも対象が「大文字の他者」なのか「小文字の他者」なのか触れることなく——捉えられてきた経緯があるからである。

かたやラカンにとって対象とは、シェーマ L にもあるように a' と a との関係性から紡ぎ出される相対価値であり、関係性（「想像的」直線）の基軸となるのは A である。二つの対象——たとえば「ダブルヒロイン」のアナとエルザ<sup>8</sup>——が二人だけの閉じた関係にならないのは、A が背後に存在することによってはじめて二人のドラマが生起するからである。「汝と我」の二人だけの閉じた世界に見えるのは、単に「大文字の他者」が姿を現さないだけの話であって、現さないからこそ「汝と我」の絆が硬く見えるのである。そして筆者の主張はこうだ。この A だけが持ちうる非人間的共感を、通常の意味の共感と区別する意味合いを込めて、「共感力」と呼ぼうと思うのである。

この観点からあらためて共感と共感力の違いを整理すると、前者が情感的、親和的だとすれば、後者は無機的、強制的な性質を持つ。「隣人」は明らかに後者に属すが、クレーマーや監視者になりえても、いたわりや慈しみを交わす関係にはどうしてもならないのは、隣人愛が恋愛や家族愛とは本質的に別種の“愛”だからである。では両者のどこが違うのか。共感力において愛する主体は人ではなく、人の心のどこかに棲息し、「愛せよ」と耳元で囁く「良心の声」である。もちろん強制力はない。だから命令というより理想や理念に近いのだが、心の外に追いやることができないぶん、かえって質の悪い「自我理想」（フロイト<sup>9</sup>）として、ある種の強迫作用をもつ。

一方、プレッシャーのあまり、良心を心の外に追い出すことで「わたしだけの理想」をもとうとするのが、自我理想の反転形である「理想自我」である。言葉の順序が入れ替わっただけのこれら二つの用語はすこぶる紛らわしいが、フロイトもこれには不満をもっていたようで、後に「超自我」という、より高圧的ニュアンスの名称に変更することになる。いずれにせよここで注意したいのは、共感力は必ず

しも「人間力」を高めるものではなく、仮に高めたとしても、超自我という内なる外圧によって「～させられる」感がより実情に近い。でもそれだと、人間はただの操られるパペットに過ぎなくなる。一見能動的でみずからの意志で行動したように見えて、じつは事前に用意されたシナリオ通りというのも興ざめだし、人間だけが持つ特権である「主体」としての意味がなくなってしまうのではないか。

こうした起こりうる疑問に答えるため、あらためて「文化への不満」に立ち戻ってみよう。まず、すべての発端は「文化」（われわれの文脈では「大文字の他者」）にあるが、コペルニクス的転回を境にして（Aを中心とする）天動説の前史と（Sが中心となる）地動説の後史の二つに分かれる。後者が拠り所とする人間中心主義とは文化・文明よりも人間を重視する態度のことだが<sup>10</sup>、そもそもの起源は、誰もが他人より自分の利害を優先する「神々の世界」、もとい弱肉強食世界への恐れにあった。少しでも考えてみれば分かることだが、勝者を含むすべての人間が命の危険に晒されるような社会が永遠に続くはずもなく、全員が武装放棄するほうがはるかに長生きできることに気づくことになる。こうしてよくいえば平和、悪くいえば休戦状態が訪れることになるが、いずれにせよ平和と引き換えに人間はある大切なものを失うはめになる。フロイトによれば、それは——ここで突飛な展開になるが——「幸福」である——。

攻撃衝動を放棄すると、人は幸福とは感じないものである（2007: 228）。

そもそもなぜ「攻撃衝動を放棄すると、人は幸福」を感じるができないのか。それは「人間だから」という漠然とした理由以外みあたらないが、他の生き物といざ比較してみると、有無を言わさぬ説得力をもつのも事実である——。

蜜蜂やアリなどの一部の動物では、現在のわたしたちでも感嘆するような国家組織、機能の配分、個体の欲望の規制などを実現しているが、それには数千年の時間がかかったのかもしれない。しかし現在の人間の際立った特徴は、わたしたちがこうした動物の家に生まれたとしても、そして動物の国において個体に割り当てられているどのような役割を与えられても、幸福であると感じないであろうということである。（同前: 244-245）

フロイトの凄みは、こうしたごく当たり前なことをさらりと書けてしまうところにあるが、攻撃衝動と幸福をセットでみなすところは、どうみても尋常ではない。ところがこの突飛な組み合わせこそ、超自我の「超」に込められた文化形成の一大転機、すなわちそれまでの主体の内と外という対立図式を主体の中にそのまま取り込むトポロジー構築につながるのであった——。

文化は、みずからに対立する攻撃を抑制し、無害なものとし、できれば遮断するために、どのような手段を利用しているのだろうか。＜中略＞個人は自分の攻撃欲を無害なものにするために、どのような方法を採用しているのだろうか。それは想像もできないほどに奇抜なものだが、ごく手近に

ある方法なのである。この攻撃欲を内側に向け、内面化し、それが発生した場所、すなわち自分の自我に向けるのである。

このようにして自我に向けられた攻撃欲は、超自我として自我のほかの部分と対立している部分に取り込まれ、これが「良心」となるのである。この良心は、ほんらいなら他の見知らぬ個人に発輝したかったはずの強い攻撃性を自我にたいして行使するのである。こうして、厳格な超自我と、超自我に支配された自我のあいだに緊張関係が発生する。これが罪の意識であり、これは自己懲罰の欲求として表現されるのである。(同前: 245-246)

これをフロイトのもっと身も蓋もない言葉で言い換えると、彼が知人に語ったとされる言葉——「人間を幸福にしようとしてはいけません。人間は幸福になろうとはしないのですから」(金関、2006: 218)——もこれと同様のことを言っている。ちなみにここでいう「幸福」とは、手を伸ばせばすぐに届くような慎ましやかなものから、ディズニーのプリンセスストーリーのような天にも昇る心地にさせる希少なまでのまで幅広く捉えるべきだが、どの程度の幸福であろうと——ここが身も蓋のなさの所以なのだが——仮に実現できたところでその先に待っているのは、フロイト自身が引くゲーテの箴言「素晴らしい日々も、それがつづくとなりがたくなる」状態だけである(フロイト、2007: 152)。もちろんディズニーも例外ではなく、肝心のラストを締めくくる定番セリフ「その後ずっと幸せに暮らしました (“happy ever after”)」の詳細については、いっさい教えてくれないの(こっちはあまり知りたいとは思わないが...)

それと比べると、メンヘラーのほうが自分の病状について生き活きと語っているぶん、ある意味幸せなのかもしれない。それにしてもメンヘラーはなぜかくも饒舌に語ってやまないのか。それはフロイトによれば、幸せの証したる愛への欲求が包み隠さず表現されているからだ——。

メランコリー患者(筆者註: うつ病患者)のさまざまな自責の訴えを根気よくきいていると、しまいには、この訴えのうちでいちばん強いものは、自分自身にあてはまるのは少なく、患者が愛しているか、かつて愛したか、あるいは愛さねばならぬ他の人に、わずかの修正を加えれば、あてはまるという印象をうけないではいられない。〈中略〉自己非難とは愛する対象に向けられた非難が方向を変えて自分自身の自我に反転したものだと思えば、病像を理解する鍵を手にいれたことになる。(1970: 141)

もちろん本人はそのことを知らないが、無知のおかげで心ゆくまで自分を責め続けることができる。知らないことで得る享樂——ジジエクがたまたま耳にしたアメリカのラムズフェルド元高官の言葉を借りれば——「われわれはそれを知らず、それを知らないということも知らない」知(2008: 94)——あるいはラカンがもっと簡潔にいう「それ自身を知らない知」(同前: 95)、これこそがフロイトの「無意識」である。

こうして、われわれはシェーマ L をもとに無意識の所在を A におき、そこに「共感力」の源泉を見出した。共感という人間的な営みに「力」が加わることで、「大文字の他者」というまったく得体の知れない別の存在が浮上することになる。ところでここで問題となるのは、「同一化」の概念である。ラカンはこれを——フロイトの「圧縮」と「置換」を記号学的側面から、それぞれ「隠喩」と「換喩」に結びつけて考察した。隠喩とその対概念である換喩との見分け方は、「各位」<sup>11</sup>——主語なのか、目的語なのか——によって、前者だと「隠喩」、後者だと「換喩」に類別される。うつ病患者は目的語 a の位置で相手の自我 a' に換喩的に同一化している。一方、もし上の引用文で自我の代わりに「わたし」（主語）が主語としての自分以外の誰か（「わたし'」）に同一化したとしたら、隠喩的に同一化することになる。

ここで注意したいのは、ラカンと違いフロイトにはまだ主体という概念がなく、自我が主語なのか目的語なのか判別しづらいことである。ただ上の文にかんじていえば、おそらく自我で間違いない。なぜなら、同一化の対象である「愛する対象」を「愛する主体」とに置き換えるのはどう見ても無理があるからだ。一方、換喩としての同一化は述語のレベルで起きる。たとえば、それは自身のコンプレックスの種である容姿であったり、性格であったり、学歴であったりと人によって様々だろうが、どれもわたしという“全体”の“一部”としての属性であり、主語である「わたし」とイコールにはならない（ことわざを逆さまにすると、「小は大を兼ねない」）。等価になるのはシェーマ L の「想像的」対立軸のあちら側 a' であり、たとえば美人の母から不幸にも十人並みの器量 a' しか受け継がなかった娘が、母を恨む代わりに自分の容姿 a を責めるといった、ある意味非常にわかりやすい——なぜなら「想像的」とは視覚に直接訴える属性だから——転移現象がそれにあたる。

一般に言うところの「共感」もこうした一部をめぐる共有を指すが、ただ一部が同じである必要はかならずしもなく、各人各様に異なる不幸の体験（肉親の死や突然のリストラとか）が「不幸」というフィルターを通じて類語化され、共感し合うこともよくある。もっというなら、a' と a は同類である必要がないばかりか、交換の対象として別物であるほうがむしろ望ましい、というか、ありがたみを感じる。大切なのは中味でなく価値であり、それこそペンとペットボトルが単に同じ 100 円という理由だけで相互に交換対象となることのほうがより大切だ。共感が「共感なき共有」になりがちなのもこうした理由による。そのさい、交換主体にとってペンとペットボトルがなぜ同じ値段なのかは誰にも定かではなく、納得できなければ交換は成立しないが、市場の観点からすれば交換が活発であるほうが望ましいので、交換を促すための禁じ手がいつの頃か奇しくも生み出された。貨幣商品による仲介がまさにそれであり、それにより 100 円でペンを買う際に無意識（共時的）にうずまく雑念——同じ 100 円でもっとよい品物と交換できるのではないか？——が取り払われ、貨幣との交換、つまり価格（100 円）だけに専念できるようになる。

もちろん人にも同じことは言えて、産婦人科の例だと、患者でごった返す待合室のすべての患者たちに共感を示すのは物理的に不可能だが、そんなときたまたま隣の誰かに共感を抱いた場合、公平心の強い人ほど残りの漏れた人たちを結果的に無視したことに対して罪責感もつかかもしれない。とはいえ、すべての人に声をかけたところでひとりあたりの共感量が薄まるだけだし、それなら何もしないほうがマシではないか——。

わたしが昆虫やミミズやシマヘビと同じように、地球上の生物だというだけの理由で隣人を愛するのだとすれば、隣人に注がれる愛はごく微量なものになってしまうのではないだろうか。(2007: 218-219)

にもかかわらず、フロイトが隣人愛を放棄しないのはなぜか。それは、べつに彼が博愛主義者だからではなく、「共感なき共有」とは真逆の「共有と共感の一致」からくる——これまでさまざまな純愛小説が描いてきたような、あるいは最近だと過度な母子密着の果てに起こる——たがいを破滅に追いやる悲惨な結末を回避するための方法として、それしか手がないからだ。では、フロイト（そしてラカン）が提唱する隣人愛とはどのようなものか。

ここで「置換」「換喩」の議論から「圧縮」「隠喩」の議論——あるいはシェーマLの「想像的」軸から「無意識」の軸——に話を移す。先の議論で問題になったのは、目的語（対象）としての自我の同一化だったが、ここで問題となるのは主語（主体）の同一化である。直線と点線が構成する「無意識」の軸においてSとその対極に位置するAがここでは同一化の関係にあり、しかもベクトルの向きはA→Sと、主体は同一化される側になる。そこからまずいえることは、主体は同一化の自覚をもたないということ、次に相手が可視化できない得体のしれない存在であるため、自覚が困難になることである。よって、隠れたロジックをあぶり出すには、経験的要素抜きの上の仮説を立ててみるしかない。

## 8 「大文字の他者」とわたし

というわけで、ここからシェーマLを全面に据えて一気に結論へと向かうが、なかでも中心となる問いが「大文字の他者」Aの正体についてである。ところがシェーマLの理論としての本質は、四つの項(S、a、a'、A)のどれもがそれぞれ何か別のものの代理であるところにある。かくして母の代理としての生きた父……のさらなら代理としての死んだ父……のさらなる代理としてのA……、と無限に代理の連鎖が続くことになるが、シェーマLの図式として意義は代理の連鎖よりも、むしろ任意の代理が他の三つの項とその都度とりむすぶ関係性にある。この観点からAの一連の代理群のなかからとくにSとの関係(A→S)で異彩を放つ代理を選ぶとすれば、それは「超自我」であろう。

そもそも主体を監視する超自我という審級が従来の「良心(の声)」よりも厳格で高圧的な含みをもつのは、「主体性」(自由意志、市民権、「良心に従って…」、etc.)にお墨付きをあたえるのと引き換えに絶対服従を強いる権威的存在だったその歴史的起源にあり、A→Sのベクトルは、主体の口答えをいっさい許さないことを示唆している<sup>12</sup>。それでもあえて口答えするとどうなるか。実際、これまで神や法や社会に対し反旗を翻した人間は数え切れないほどいるし、そこまでしなくとも、若くしてガンの余命宣告を受けた人間がおのれへの理不尽な仕打ちに思わず神を恨んだりすることはよくあることだ。

ちなみにここで「大文字の他者」の代表として神を挙げたのは、ラカンが無神論を否定する根拠として、神と無意識がじつは同じものであり、神の否定はそのまま無意識の否定につながるからだが、シェ

一マ Lにもこれは裏書きされていて、主体がどれほど神を呪おうと、無意識の軸が A に向かわない以上、呪詛は届きようがない。もし届いたら神の御姿を拝められるだろうが、神を見た者はいないし、その事実は主体にとっても織り込み済みである。そしてこの織り込み済みながらそれでも見たい気持ちこそ、無意識の欲望に火をつける“原因”<sup>13</sup>でもあり、欲望が続くかぎり神はどこかに存在し続けることになる。

そして神が存在し続けるかぎり、超自我を通じて主体に訴えかけるのが「汝の隣人を愛せよ」という脅しめがいの不可能なメッセージである。もちろんこれは全人類に向けたメッセージであり、選ばれた一部の不運な人間だけに課せられた義務ではない。あなたの隣に住む普段ろくに挨拶も交わさない住人がまさにその理由からよき隣人であるのと同様に、お隣の住人にとってもあなたはできれば目を合わせたくないよき隣人である。報道番組での定番の常套句——不慮の事件に巻き込まれ尊い命を失った被害者についてご近所さんが語る人となり（「とても家族思いで」「礼儀正しく」「いつも笑顔で挨拶されて」云々）——が、単に故人を偲ぶ以上の象徴的な意味合いをもつのも、人間として最大の責務である隣人愛を故人が貫いたこと<sup>14</sup>を社会に発信することが、故人にたいする最大の供養になると誰もが思っているからだ。

このように、失ってはじめて分かる（正確には分かった振りをする）隣人（＝故人）の何気ない優しさへの心からの感謝こそ、普段のよそよそしい儀礼的（相互受動的）近所付き合いとは対極の、相互能動性のほんらいあるべき姿であろう。しかし問題は、いままさに述べたように、相互受動性から相互能動性に転換するには本人たちの自助努力だけでは不可能で、隣人の喪失という偶然の機会がなければ、なかなかその方向にはいかないことである。

そんな条件のなか、あえて現実ではなく理論のなかに何かしらヒントがあるのではないかと筆者なりに目星を付けたのが、精神分析の土台を築くエディプス・コンプレックス理論の、なかでもその中核をなす「原父殺し」神話である。そもそも原父殺しとは、父の横暴に苦しむ子どもたちが家族を守るために多勢に無勢の論理で企てたものだが、その結果予期せぬことが起きる。それは共犯者同士の負の連帯からくる相互不信であり、一定の距離をおいたよそよそしい隣人づきあいの起源もそこにある<sup>15</sup>。それにしても、なぜ家族に災厄しかもたらさぬ父を葬り去ることでようやく訪れた平和とは真逆の、相互不信という負の遺産だけが残される結果となったのだろうか。

フロイトの主張はこうである。それは、真の相互信頼が築かれるのは物言わぬ死者とのあいだだけであり、生きた者同士のつながりには裏切りへの不安が常につきまとう。その意味で、人間性を表す真理の最たるものは“嘘”である。ところで、生者と死者だけがもてる真の絆から真っ先に思い浮かぶイメージは、教会や聖職者を介さぬ神と信者の直接的触れ合いだが、神の威厳が地に落ちた現代の世俗社会において、かつての偶像崇拜のようなイメージを通した関係構築はもはや不可能だろう。それよりもラカンが提示する「父の名」や「父性隠喩」といった、極度に抽象的で無味乾燥な概念で捉えたほうがよほど理解は深まる。そこで二つの違いを説明すると——。

まずは「父の名」。これは仏教の戒名のようなもので、生前親しんだ俗名と異なり親しみを込めて呼べるような名前ではない。おそらくその意図とは、「どんなに熱心に位牌を拜んでも、お父さんはここには



いない。あるのは名前だけだよ」といわば一種の注意喚起だが、今どきそんなことしなくても遺族たちは位牌になど目もくれず、目を閉じて生前の姿に想いを馳せるだけだろう。とはいえ、彼らの想いはあくまで過ぎ去った過去の父の思い出であって、時間が経てばその思い出も色褪せてくる。それでも遺族たちの心のなかで「お父さんは心の中で生きている」のだとしたら、それはあくまで信仰という身振りを通してであって、いきなり子どもたちの前に現れようものなら、恐怖のあまり腰を抜かすだろう。そうならないためにも父をいわば名前のなかに封印しなければならず、そのようにしてはじめて生前とはまた違った正しい親子の接し方が可能となる。

かくして父は二つの相異なる次元を生きる父、シェーマLでいけば、「無意識」の軸上の「父の名」Aと、「想像的」軸上の父aに分裂する。後者において、父があたかも生きているかのような錯覚が生まれるのは、そこがビジュアルな想像をかきたてる軸であり、くまモンやミッキーマウスがそうであるように、生別を越えた色褪せない存在として表象されるからである<sup>16</sup>。

次に「父性隠喩」。隠喩というからには、別の何かの「置き換え」もしくは「代理表象」としての父ということになるが、これもエディプス・コンプレックスと絡む問題である。子どもが母との性愛関係をみずから禁じるために作った神話が父殺しなのだが、そもそもなぜ父は殺されなければならなかったのか。むしろ生きているほうが父の監視のもと禁止を守りやすかったのではないのか。答えは上に述べたとおりだ。すなわち、父は殺されることによってはじめて超自我となって“生きる”のである。そのために父が実際に殺されるのか、それとも「象徴的」に殺されるかはあまり重要ではない（現にほとんどの父はそのまま生きている）。とはいえ、象徴が“言葉”による“もの”の死である以上、父は生きていると同時に死んでおり、このいわば“死に生きる”父が超自我を通じて下す命令が他ならぬ「汝の母と姦淫するなかれ」である。

そしてその死んだとされる父の遺志によって封印されたのが、子どもが最初に出会う他者である母のセクシュアリティであり、これを通じて、母の他者性（M“Other”）はそのまま父の他者性に象徴的に受け継がれる。これが「父性隠喩」であり、以後、シェーマLで説明すると、父は象徴的「大文字の他者」と想像的「小文字の他者」に分別される。それまで一つであった他者（母）も同様に「小文字の他者」（m“other”）に場所を移動し、もともといたAの場所に父が母の代理として君臨することになる。ちなみに象徴化により封印された父は、“言語的生きもの”——ラカンのもっと抽象的な言葉を使うと、「主人のシニフィアン」という“文字通り”文字として——生きることになる。

## 9 結びにかえて

せっかくなので最後に応用も兼ねて、これまで論じた観点からいま世界中で進行中の父性の衰退と母性の強化を概観してみると、それぞれ「大文字の他者」の小文字化、「小文字の他者」の大文字化と言い換えることができよう。母性の父性化（大文字の他者化）は、母性的超自我として「汝の母を愛せよ」（＝母以外を愛してはならぬ）という、最近流行りの言葉だと「毒親」問題として捉えることができる。一方、父性の母性化（小文字の他者化）は、成熟拒否やアンチエイジング（オタク、引きこもり、

マザコン、純粋少女、アイドル、etc.)の問題として、とくに日本はサブカル発信地として「子どもが主人公、大人は脇役」という、若者文化よりもさらに年少の第二次性徴期以前の小さな世界の拡大がいまも進行中である。

一方、Aを起点とする「共感力」との関連で母性的超自我を見ると、大文字の他者の私物化——GAF A (グーグル、アップル、フェイスブック、アマゾン)といった超グローバル企業が、国家や国連を凌ぐ政治的影響力を駆使し地球の未来を脅かす事態——が、ジェンダーイシューをはるかに越えた今日の新自由主義のイデオロギーとして、政治的アパシーや民主主義の形骸化——その究極の命題が「アメリカと中国のどちらのほうがより民主主義か？」<sup>17</sup>である——を加速させ、シェーマLの基軸である無意識の闇をさらに暗くする事態となっている。

ちなみに上記のグローバル企業に「超」(super)の冠を付けたのは、これらの企業が「超自我」的影響を駆使することでブランド力を高めてきたこれまでの経緯と重ねるためである。日本のようなサブカル大国において、とりわけiPhone<sup>18</sup>のシェアが飛び抜けて高いことにも表れているように、超自我的商品がもつ魅力には脅迫的要素が強い。ジジエクのある本のタイトルにもあるように、超自我が主体にくだす命令とは、勤勉や努力や節制といった近代的美徳とは真逆の「汝の症候を楽しめ！」(2001)であり、新型iPhoneの発売日前に徹夜して並ぶ購買者たちが開店直後、待ち構えていた店員たちと手を合わせて喜び合う姿こそ、本稿のテーマである「共感力」のもっともシュールなイメージであろう。これが従来の「共感」と決定的に違うのは、売る側の店員と買う側のiPhone信者が立場の違いにもかかわらずiPhoneの魅力に取り憑かれ点では一步も譲らず、共有と共感が奇跡の一致を見せる点にあるが、シェーマL的には彼らはどちらも「想像的軸」以外の道知らない匿名の一消費者にすぎない。にもかかわらず、「相互能動」的といつてよいほど——同じスマホ売り場でも超自我とは無縁のアンドロイドとは裏腹に——売る側と買う側が活発に悦びを分かち合う光景は異様に見えるが、同じ「症候」を抱えた者からすると、思わずハグしてしまうほど睦まじい光景なのであろう。

では、場所を変えて、当初の産婦人科の待合室をアップルストアに見立てると、そこに何が見えてくるだろうか。すでに現実に起きていることだが、待合室であろうと、どこの公共空間であろうと、見知らぬ他人がいようとまいと、誰もが自分のスマホ画面に目を集中させているのが日常光景であり、脇目も振らない以上、目のやり場に困ることもない。まわりがどれだけ赤の他人でも、スマホで友だち(a')とつながっていれば、不安や孤独を感じることはない。しかし、本論で繰り返し述べてきたように、a'とaの想像的關係を背後で支えるのは、あくまでAとSの無意識の「象徴的軸」であって、充実した二者關係を「楽しむ」のは当事者たちの自発的関心に基ついたかのようにみえて、じつは「大文字の他者」からの命令に無意識に従った結果であり、かつ命令に従う喜びでもあるのだ。

それゆえ、逆にAの支えのない他者とは想像的關係を結べず、Aが提供するアプリでSNSを介せば「友だち」になれても、介さなければ隣にいようとずっと他人のままである。電車内で他人の目を憚ることなく化粧に没頭する女性にとって、その場に居合わせた乗客たちは「大文字の他者」でも「小文字の他者」でもなく、ただの電車内風景の一部である。そんな傍迷惑な女性に勇気を奮い「化粧はお控えください」と注意したらどうなるか。それまで見て見ぬ振りをしていたまわりの乗客から称賛を浴び味

方につければ、Aのいわばメッセンジャーとして権威を振りかざすことができるが、同時にa'としての女性とつながりは永遠に絶たれる。逆にまわりから黙殺されれば、「大文字の他者」の世界から排除の憂き目に合う。

ネットで炎上した人物を社会から葬り去ろうとする不特定多数の匿名者たちは、炎上した人間とのつながりを放棄しているが、いまや誰もがちょっとした失言でネットの獄門台に晒されるような環境では、誰もがAの意向を気にし、多大なストレスを溜め込まざるをえなくなっている。ところがそのストレスをどう発散するのかというと、むしろ炎上の血祭りに加担してサディスティックな快楽に耽るのだから、負のスパイラルは永遠に続くことになる。ジジエクの「汝の症候を楽しめ！」はまさにこのような転倒した「永劫回帰」(ニーチェ)を指しており、これを止めるにはみずからメッセンジャーを務める場所の「大文字の他者」を否定するしかないが、はたしてそんなことができるだろうか。

ラカンがドストエフスキーの「もし神が存在しなければ、そのときはすべてが許される」を「明らかに素朴な意見」と斥け、「すべてが禁じられる」と真逆の見解を述べた。(1998: 215) これをジジエク風に言い換えれば、「症候がなくなれば、すべてが禁じられる」となる。最近、診断されてもいないのに「うつ」や「発達障害」を勝手に名乗る若者が増えているそうだが、これなどもそうした「症候」の一環といえるだろう。

禁じられることへの恐れをフロイトは「去勢不安」と呼んだが、ラカンは去勢されることが大人になることへの第一歩と位置づけた。両者は一見矛盾するようだがじつは同じことを言っている。もともと去勢とは母への性的愛着を無理やり絶たせることだが(これを婉曲に言い換えたのが「乳離れ」である)、去勢後も「前科」は残り、超自我が再犯への監視の役目をはたす。こうして――。

いまや悪の行為を発見されることに対する不安は姿を消し、悪をなそうと意図することの違いもなくなる。超自我の前では思考を含めて、何も隠すことはできないからである。(2007: 249-250)

ドストエフスキーの見解では、神が死ねば悪事を「隠す」ことができるが、ラカンからすれば、神の死は「原父殺し」と同義であって、死のうが死ぬまいが、すでに超自我に姿を代えて主体のなかに棲みついている以上、事態は何も変わらない。悪事をなそうとなすまいと結局は罰されるのであれば、悪事に居直る気持ちが芽生えてもおかしくないが、一部の犯罪者たちを除きそうならないのは、もともと太古の昔、原父殺害のあと子たちのあいだで、食うか食われるかの残忍で容赦ない無秩序状態が到来したことへの歴史的――というより神話的――反省が脳裏の片隅に残っているからだろうか。いずれにせよ罰を回避するには超自我に対して従順になるという途しかない。なのに――。

人が道徳的であればあるほど、良心はますます厳格で疑り深くなるのであり、ついには聖なるものの領域のもっとも奥深くを極めた人ほど、きわめて鋭い罪の意識をもつようになる。(同前: 250)

民度や公共道徳がもっとも進んだ国の一つである日本において、これらが遺憾なく発輝される「聖なるものの領域」として誰もが思い浮かべるのが、混んだ通勤電車内であろう。大声のお喋りや携帯通話、座席の座り方から混雑時のベビーカーの持ち込みと、あらゆるマナー違反の誘惑を絶ち、肋骨が折れてしまうほどの混雑時にも泣き言も言わず——人によっては毎日往復四時間——ひたすら耐えがたきを耐え、忍びがたきを忍ぶのだが、その見返りは何もない。ないどころか、さらに研ぎ澄まされた罪の意識が、さらに過酷なマナーの遵守の徹底を課すことになる。ほとんど毎日のように起こる人身事故が電車マナーと直接関連しているのかどうか定かではないが、自殺の原因の多くが明らかメンタル（とくにうつ病）によるものとしたら、うつ病に罹りやすい人の特徴として挙げられる「真面目」「勤勉」「几帳面」「責任感」等の「聖なるものの領域」に入るための資格条件がたまたま悪い用途に使われたとしても不思議ではない。その意味では、人身事故はひとつの殉死であり、ダイヤの乱れにより駅で待ちぼうけをくらう通勤通学者たちは、ほんらい衷心を込めて同胞の死を悼むべきなのに、「そんなに死にたいなら別の場所で死ね」「俺たちまで巻き添えを喰らわせるな」と怒りのツイートが“バズる”のは、彼らがいまだ「聖なるものの領域」にまで達していないことの証しなのか。

もっとも、そんな皮肉の一言を言いたくなるのも筆者自身、「明日は我が身」のストレスを溜め込んでいるせいなのだろう。当初の産婦人科の待合室から話が随分逸れてしまったが、これも超自我支配の拡大の一環と思えば納得もいく。もっとも、研究論文を書いてまで陰謀(?)に加担してよいのかと自問自答してしまうとさらに収集がつかなくなるので、このへんでやめておく。

#### 参考文献一覧

大澤真幸（2008）『不可能性の時代』、岩波新書。

金関猛（2006）「解説」『あるヒステリー分析の断片——ドーラの症例』金関猛訳、ちくま学芸文庫。

ジークムント・フロイト（1970）「悲哀とメランコリー」『フロイト著作集6』、井村恒郎訳、人文書院。

-----（1997）「ナルシシズム入門」『エロス論集』中山元訳、筑摩書房。

-----（2007）「文化への不満」『幻想の未来／文化への不満』中山元訳、光文社古典新訳文庫。

ジャック・ラカン（1987a）『精神病（上）』ジャック＝アラン・ミレール編、小出浩之他訳、岩波書店。

-----（1987b）『精神病（下）』ジャック＝アラン・ミレール編、小出浩之他訳、岩波書店。

-----（1998）『フロイト理論と精神分析技法における自我（上）』ジャック＝アラン・ミレール編、小出浩之他訳、岩波書店。

-----（2000）『精神分析の四基本概念』ジャック＝アラン・ミレール編、小出浩之他訳、岩波書店。

-----（2005）『無意識の形成物（上）』ジャック＝アラン・ミレール編、佐々木孝次他訳、岩波書店。

ジョルジョ・アガンベン（2002）『中味のない人間』岡田温司他訳、人文書院。

スラヴォイ・ジジエク（2001）『汝の症候を楽しめ——ハリウッド vs ラカン』鈴木晶訳、筑摩書房。

-----（2008）『ラカンはこう読め！』鈴木晶訳、紀伊國屋書店。

土井隆義（2008）『友だち地獄』、ちくま新書。

## 註

- 1 確証はないが、造語としての「～力」ブームの火付け役は、赤瀬川原平の『老人力』（1998年、筑摩書房）だろう。これを機に産み出された新語として他に「女子力」「コミュ力」「孤独力」「言葉力」等がある。
- 2 もっとも嗤う側も嗤う側で、「なんJ民」のように徒党化するきらいがあり、両者の敵対関係を相互受動性の側面から捉えることもできよう
- 3 作詞作曲を手がけた槇原敬之がゲイであることをカミングアウトしていることと、これを歌ったSMAPが全員異性愛者であることにほとんどのファンが矛盾を感じていない、という点でも楽曲のタイトルは示唆的である。
- 4 蔑称としての白人の他に表現に「white trash」「hillbilly」「redneck」「underdogs」といったものがある。
- 5 ちなみにこの「運命」という言葉は、彼らが愛するカントリー・ミュージックの主要モチーフであり、ある調査によれば、カントリーミュージックのファンには自殺者が多いという。2004年度のイグノーブル医学賞受賞論文、”The Effect of Country Music on Suicide”, Stack et al, Social Forces, September 1992 71(1)を参照。
- 6 ラカン、1987: 21。
- 7 「例えば、私がある文章を話し始めたとします。皆さんがその文章の最初の言葉がどこにあるかを理解するためには、私が文章の最後の言葉を言ったということがどうしても必要なものであって、それこそが文章の定義なのです。」（ラカン、2005: 11）
- 8 拙論『『ダブルヒロイン』の変奏——『ありのままに』（「アナと雪の女王」）、『相対的価値形態論』（マルクス）、『対象 a』（ラカン）、等々』参照。『常盤台人間文化論叢』第一巻第一号（2015: 85-91）。
- 9 「自我理想」と「理想自我」の違いについては、フロイトの論文「ナルシシズム入門」参照。
- 10 「和を以て貴しとなす」（聖徳太子）以来、人よりも組織に価値を置いてきた日本文化においてすら、会社軍国主義ピークの行動成長期に「人間の命は地球より思い」（日航機よど号ハイジャック事件での当時の福田赳夫首相のコメント）に多くの日本人が感銘を受けたぐらいだから、個人主義の芽はわれわれが想像する以上に——その一つの尺度として自由主義（個人主義）と民主主義（人間一般の主権尊重）の混同が挙げられる——人間本来のあり方として浸透しているといえよう。
- 11 「隠喩は何よりも位置的な分節化に支えられているのです」という時の「位置的」とは端的に主語か目的語かのどちらかを指しており、主語であれば、隠喩、目的語であれば換喩となる。ラカン（1987b）『精神病（下）』、118。
- 12 蛇足だが、「母娘密着」の男性版「父息子密着」問題をついぞ聞かないのもこうした理由によるものだろう。一方、より複雑な「父娘密着」問題は、「ヒステリー」という精神分析の支柱ともいえる問題ともなっているが、文字数の都合上本論では触れない。

13 もっとも、ラカンのいう「原因」は一般に理解されているところのそれとは真逆で、「原因とそれが引き起こすものとの間に、つねに、うまくいかなさがあります」（ラカン、2000: 27）と、原因と結果のあいだに亀裂が走っており、「潮の満ち引きの原因は月の満ち欠けである」（同前）のような神話的不可能さで納得させる誤魔化しの側面がある。

14 「故人が実際にそうだったと明言できるほど親しかったわけでもないのに…」云々、といったツッコミほど無粋で故人を貶める行為はないことを誰もが弁えていることのほうが重要である。

15 “隣人の集まり”としての家族は、きわめて今日的な問題である。今年（2018）もっとも人気を博した TBS テレビドラマ『義母と娘のブルース』が様々な点で今後の家族ドラマのあり方を占うものであることを論じた記事参照。[https://headlines.yahoo.co.jp/article?a=20180911-00057395-gendaibiz-bus\\_all](https://headlines.yahoo.co.jp/article?a=20180911-00057395-gendaibiz-bus_all)

16 あるとしたら忘れ去られることぐらいだろうが、テレビの「あの人はいま？」や「一発屋芸人特集」がコンスタントにそこそこの視聴率をとっていることからわかるとおり、一度定着したイメージを視聴者はなかなか忘れることはできない。それとも忘れたくない？

17 あるいは、アメリカの著名ジャーナリスト、デヴィッド・サイモンの言葉を借りると、どちらのほうが「全体主義と手を結んだポピュリズム」の深刻度が高いか。<http://rollingstonejapan.com/articles/detail/29007/1/1/1>

18 カタカナ表記を避けるため、アップルは公式カタカナ名称を「アイフォーン」となんとも間延びした表記にすることで、姑息にもこれまで類例のないローマ字表記の浸透を図ったようだ。